

# 研究発表要旨

## ダンス学習指導に関する研究

佐分利 育代

### 1. 研究目的

学校教育における創作ダンスの研究は、学習としての創作過程を確立し、指導法もある程度現場へ定着したと思われる。しかし、「創作」の性質上、各創作過程内の学習内容は多様であり、学習者の主体的な創意に待ちかつ、指導者の指導技術にゆだねられる側面も多く、今

実験的学習指導案および記録		対象 大学1、2年生(男子7名、女子3名)					
段階	時間	日時	学習目標	学習内容	学習活動	指導者の評価	学生の反応
1	1	7月18日 9:30 ~ 11:30	「力性」の知的理解	表現運動の要因 力性の変化 学習計画	①「力性の変化」を手がかりにダンス学習をしていくことを知る。 ②「力性の変化」を含む動きの体験 ③作品を創り発表することを知る	B B A	
		18日 13:30 ~ 15:30	強弱感	動きの 大きさ デザイン 速さ リズム	①歩、走、跳を大きさを選わせて動く ②同じ速さでポーズを変化 ③ポーズからポーズへ様々な速さで変化 ④同じ動きを様々な速さで動く ⑤5→4→3→2→1拍子と変えて動く ⑥アクセントの変化 ⑦短かい一連の動きを速さや大きさを変えて動く	B A A B B C C	③「ドラマができそうだ」
2	3	19日 9:30 ~ 11:30	変化の仕方		①だんだん強くなっていく動き(a) ②走→静止 1人、2人 ③  の感じで ④③から連想して1人で即興 ⑤④を3・4人で ⑥④より全員で習作	A B A A B B C	④「怒り」「夕立ち」 ⑤円形が多い ⑥「怒り」隊形にこだわる
		19日 13:30 ~ 15:30	急変と継続	発散する感じとこもった感じ 衝激と流れ	①力をだんだん発散させる動き(b) (a)+(b)を通して踊る ②「うねり」こめられた力、発散する力を全員で習作 ③衝激を感じる動きづくり(c) (a)+(b)+(c) (a)+(b)+(c)+流れを感じて即興	A A A A A B	②組体操のような動き、かたちをつくりたがる ③1年生男子は気持が続かない
3	5	20日 9:30 ~ 11:30	集中と離散	mass	①(a)+(b)+(c)を集まったり、離れたりして動く ②グループで異なった3つの隊形を決め、向き、方向、速さを変えて移動(5名) ③「まつり」で習作(全員)	A B A	②「同じ形なのに感じが違う」 ③花火(3つに分かれ) みこしとしし 踊り だんだん去って行く
		20日 13:30 ~ 15:30	クライマックス	いくつかの変化とクライマックス 変化とまともなブレイズ	①いくつかの小さな変化のある動きを創りクライマックスになる部分を即興する(全員) ②「決闘」で習作 ③(a)+(b)+(c)+(d)+即興 ④作品創りのグループ決定	B B A	②「決闘」の部分の動きが続かない ④長く続けて踊れる
3	7	21日 9:30 ~ 11:30	作品づくり	3~4人グループによる小作品	①物、テーマによる即興練習 ②作品創り	A B	①すぐに踊り始め、力動的に踊れた ②1年男子、2年男子、女子で創る
		22日 9:30 ~ 11:30	作品発表	発表と鑑賞 授業の反省	①作品の鑑賞 ②作品発表、鑑賞 ③評価しあう ④授業のまとめと反省	B A A	1年男子「暗殺」 2年男子「シンフォニー」 女子「たんぽぽ」

○印 …… 即興表現      フィルム撮影

日にもお学習指導上に残された問題は少なくないと考えられる。特に、授業という限られた時間での指導にとって、何を、どのような方法で、どの位習得させれば、ダンスの基礎としての学習といえるのかを明らかにすることは、不可欠な問題である。

本研究では、この問題を解決する一段階として、①過去の学習指導における学習内容に関する問題点を明らかにし、②「力性の変化」を学習目標とした学習によって、学習者の表現がどう変わったかを明らかにすることによって、学習内容の具体化についての手がかりを得ることを目的とした。

## 2. 研究方法および結果

### ①文献にみられるダンス学習指導の問題点

女子体育、新体育、学校体育、全国女子体育研究大会紀要のうち、1967年から1976年に発行されたものから、学習指導案あるいは実践例を収集し、導入段階において、どのような学習目標が、どのような方法で、学習内容として具体的に示されているか、その問題点について考察した。

学習活動のうち導入の段階は、動機づけと同時に、その時間や単元の学習が、何を目的とし、どのように進められるのかを学習者にも明確にとらえさせる段階でもある。しかし今回の資料では、指導者自身においても、表現活動をどのように進めていくか明瞭にとらえていないものもみられた。

したがって、指導内容と方法を明らかにし、学習内容を具体化していくことは、今後のダンス学習にとって必要な問題であるといえる。

### ②学習指導研究

表現要因のうち「力性」は、強弱・持続・急変等、最も原初的に運動と表現に結びついている側面であると思われる。この「力性」について、表のようなダンス学習指導を行ない、学習者（男子7名、女子3名の学生）の表現が、学習の前と後ではどう違うかを考察した。

なお、表現については次のような条件で即興表現を学習の始めと終りに課し、フィルム収録（8ミリ）、分析・比較を行なった。

- 刺激①メトロノームM.M. ♪=200による均一鼓動拍
  - 太鼓の一打
  - 即興表現の長さは制限しない。
  - 踊った後、そのイメージを自由記述させる。
- 「力性の変化」を目標とした今回のダンス学習によって、「踊る」技能に関しては、様々な動きをみつけたり、ひと続きの動きの中で盛り上がりやまとまりの感じを出すこと、それを踊り続けることができるようになったと思われる。また、「観る」技能についても創ることや踊ること等の色々な側面から評価でき、ある程度、学習成果が上がったと認められた。

特に、ダンス学習の経験なく大学生になった、男性という困難な対象にも、「力性の変化」を習得することから

の導入が、表現の楽しみを与え、学習時間の限界内での進歩をみるにいたったことは、「力性の変化」が導入としてダンスの表現要因からとりあげる第一次的なものであるとみても、ある程度良いのではないと思われる。

しかし、被験者の人数、個人差など、異なる対象について今後確かめる必要があり、また、他の表現要因についても、実施すべき点が残されている。

## 舞踊運動とその表現性 に関する研究

### —DesignとTempoを中心に—

松本千代栄  
柴真理子

#### 〔研究目的〕

芸術としての舞踊が、その独自の表現世界を限りなく広げるために、また、すべての人々が舞踊を共有しうる基盤を築くためには、舞踊の独自性の底に流れる共通的な基本的性格を明らかにする必要があると思われる。

舞踊運動の表現性については「動きの感情価に関する研究<sup>〔註〕</sup>」など、既にいくつかの研究報告がなされている。従来の研究は、運動の「みえ」に着目して、その感情類型をさぐることに主眼をおくものであるとみられる。しかし、「みえ」は実在の運動を越えた世界であり、舞踊の基本的性格を見出すためには、「みえ」と実在の運動との両面から舞踊運動をとらえて、その関連を明らかにすることが必要であろう。

そこで本研究は、先行研究に加えて、①実在の舞踊運動の質をとらえる方法を検討し、②運動表現の成因の中からDesign要因とTempo要因を選び、運動の質とその評定との関連を明らかにしようとしたものである。

#### 〔研究方法〕

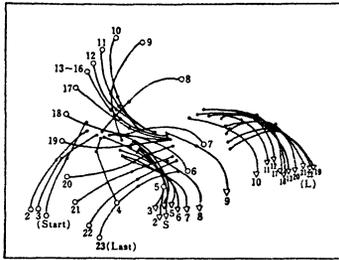
実験1では、二種のDesignの舞踊運動を三つのTempoで行ない、評定語にあらわれたDesignとTempoの関連をみようとした。なお、実験2では、実験1の普通Tempo(♩=92)の曲線的(直線的)舞踊運動をもとにして、気持ちよく踊れる限界まで同質の舞踊運動の長さを延長し、その表現性の差を追跡した。

実験材料は、踊り手(女性舞踊家)に、舞踊運動の長さ(表現性を持ちうる最少限の長さ)とDesign(曲線・直線)を指示し、二種の舞踊運動を設定し、三つのTempo(M・M ♪=132, 92, 66)で動きを行い、16mmと8mmカメラで撮影した。(実験2は、上記のように長さを延長した。)

これらの舞踊運動の質をみるために16mmフィルムによる①運動分析(形態図、運動現象図、軌跡図の作成。舞踊運動の速度、範囲の算出。運動要因の分類など)を行った。

舞踊運動とその表現性の関連をみるために、実験材料

▼直線的な動き(330コマ～369コマ) 先



▼曲線的な動き(0コマ～132コマ)

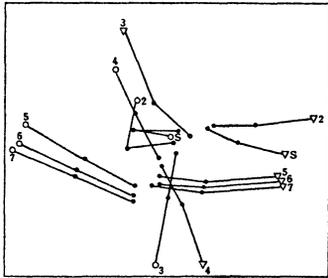
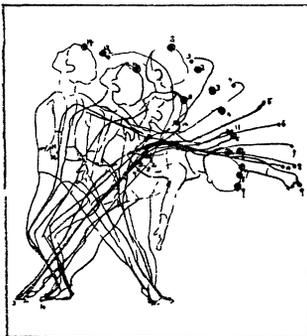
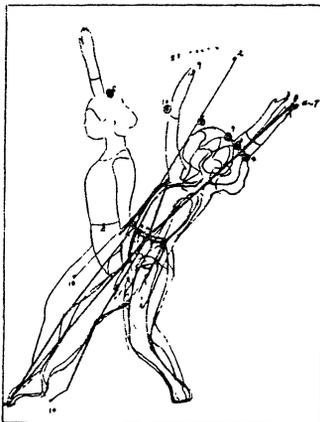


図2 そって起きる動き  
(6コマ毎に、右手先、右肩、ウエスト、膝、足先を通る体の線をトレースした。●は頭頂部を示す。

▼曲線的な動き



▼直線的な動き



(右腕が回旋を一回する間、6コマ毎に右腕の線をトレースしたもの。各々の線の3点は、肩・肘・手先を示す。○は右手先△は左手先)

Designの異なる舞踊運動の比較  
図一腕の回旋

の舞踊運動をFilmで一般女子学生(105名)に見せ、各々の舞踊運動について②評定及び、自由記述を行った。

評定結果は、評定表の各項目で「ひじょうに」を選んだ頻度が30%を越える場合を有効評定とみなして処理した。

〔研究結果〕(表1, 2, 図1参照。但し、実験2についての表、図は紙面の都合により省略)

1. Design要因と運動の質について、その結果をみると、(1)曲線的Designの舞踊運動では、①運動分析……身体の末端以外の部位が運動をリードし、また静止、運動いずれの状態においても身体で弧を形成している。②評定……三つの異なるTempoに共通して有効評定を得た用語は

表-1 評定頻度 <実験1>

曲線的Designの舞踊運動						直線的Designの舞踊運動								
要因	項目	速度	評定頻度					項目	速度	評定頻度				
			ひじょうに	やや	どちらでもない	やや	ひじょうに			ひじょうに	やや	どちらでもない	やや	ひじょうに
デザイン要因	とがった	f	14	32	12	43	4	ま	f	76	28	0	1	0
	ま	m	1	13	16	62	13	ま	m	78	26	0	0	1
	さ	s	2	5	15	25	58	ま	s	40	55	7	3	0
デザイン要因	ひかたていく	f	9	33	50	12	1	ま	f	4	26	47	25	3
	ま	m	6	51	40	8	0	ま	m	6	27	51	18	3
	さ	s	29	43	26	6	1	ま	s	23	33	59	18	2
要因	均整のよさ	f	14	45	23	23	0	ま	f	22	37	23	17	6
	ま	m	34	46	16	8	1	ま	m	26	33	21	18	7
	さ	s	31	44	20	9	1	ま	s	17	39	16	27	6
エネルギー要因	激しい	f	30	52	16	6	1	静	f	38	53	10	4	0
	ま	m	1	21	19	51	13	静	m	29	49	20	7	0
	さ	s	0	3	3	38	61	静	s	4	35	34	25	7
エネルギー要因	軽やかな	f	22	49	20	3	11	重	f	12	31	29	27	6
	ま	m	11	36	22	34	2	重	m	4	19	30	45	7
	さ	s	4	15	17	42	27	重	s	1	18	35	42	9
要因	急激的な	f	25	44	12	17	7	持	f	44	39	7	14	1
	ま	m	6	26	24	41	8	持	m	43	41	10	4	7
	さ	s	2	4	12	43	44	持	s	19	36	14	25	11
スタイル要因	スピートのゆる	f	52	48	3	2	0	ゆ	f	58	42	1	4	0
	ま	m	2	20	19	50	14	ゆ	m	23	55	14	9	4
	さ	s	2	1	1	13	88	ゆ	s	2	24	8	48	23
スタイル要因	スピートのゆる	f	23	22	26	14	10	流	f	37	52	5	9	2
	ま	m	15	15	15	29	11	流	m	55	38	9	3	0
	さ	s	5	12	15	39	34	流	s	29	52	12	9	3
要因	均等な	f	16	44	31	11	3	不	f	16	46	29	13	1
	ま	m	17	58	20	8	2	不	m	20	36	25	20	4
	さ	s	23	47	28	6	1	不	s	12	37	34	21	1

表-2 八つの舞踊運動の相関

	曲 f	曲 m	曲 s	直 f	直 m	直 s	曲 d	直 d
曲 f								
曲 m	-0.01182							
曲 s	-0.49989	0.73315						
直 f	0.75476	-0.20171	-0.63318					
直 m	0.58749	-0.19826	-0.55441	0.94448				
直 s	0.04456	0.08209	-0.04531	0.95247	0.73971			
曲 d	0.13616	0.72409	0.55231	-0.32308	-0.45821	-0.36117		
直 d	0.72294	-0.27241	-0.00165	0.97920	0.95541	0.56493	-0.36453	

## 『妓楽踏舞譜』考

丸茂美恵子

ないが、Tempoが遅くなるに従って〈まるい〉〈静かな〉〈持続的な〉〈ゆっくりした〉〈流れるような〉について、「ひじょうに」の選択人数が増し、(例・〈まるい〉について「ひじょうに」を選択した人数は、曲 f(注2)=4人、曲 m=13人、曲 s=58人で、有効評定は曲 sのみ)感情の傾向が明確になる。なお、③舞踊運動の長さが長くなると、評定語の選択(まるい、ひろがっていく、均整のとれた、流れるような)が明確になり、自由記述では、やわらかい、やさしい、きれい、美しいなどと同類語の記述が多くなり、評定の価と等しく一定の方向に拡がりが見られる。

(2)直線的Designの舞踊運動では、①運動分析……身体末端部が運動をリードし、また静止、運動いずれの状態においても身体で直線を形成している。②評定……いずれのTempoでも〈とがった〉感じは失われない。

Ⅱ. Tempo要因と運動の質についてみると、

曲線的Design、直線的Designの舞踊運動は共に、10秒間におよそ5つ以上の動きがある場合は〈スピードのある〉感じに受けとられ、その数が2つ以下の場合には、〈ゆっくりした〉感じに受けとられると認められる。

Ⅲ. これらの評定方法の妥当性をみるために、評定結果の相関関係(表2)と有効評定を得た語(表1)とを照合した結果、共通して有効評定を得た語が多い舞踊運動ほど、その相関も高くなる。(例・直 f と直 d に共通した有効評定は5語で、相関係数は0.97920)そこで、舞踊運動の表現質については、30%以上の人が「ひじょうに」感じたと言評定した語は、その舞踊運動が持つ明らかな一つの表現質であるとみなすことは妥当であると認定した。

以上、今回の研究では、本研究の限界内において舞踊運動における曲線的・直線的Designの性格を明らかにし、運動表現の形態的側面についての一つの成果を得たと認められよう。今後は、引き続いて同一の方向で継続研究をつづけ、時性及び力性の面から運動表現の特性を明らかにしなければならないと考える。

なお、学会発表後、本研究で設定した評定用語の妥当性をみるために、柴が評定用語の相関をとり「軽やかな」「重々しい」の二語以外は、評定用語として妥当であることを確認した。

(注1)「動きの感情価に関する研究」松本、川口(1972年)  
東京教育大学体育学部紀要

(注2)曲(直)……曲(直)線的Design、m……j=92、s……j=66、f……j=132、d……実験2の舞踊運動を示す。

「妓楽踏舞譜」は、嘉永7年(1854)に、初代西川鯉三郎によってまとめられた舞踊譜である。まず、この譜のもつ意義を、伝書という立場から内容を眺めると、大別して次の4つのことが言えよう。

1 「妓楽踏舞譜」の中の振は四代目扇蔵の振を伝えるものが多い。

「妓楽踏舞譜」は、その譜目の技法の説明に、詞章を引用し、それに当たる振で紹介している所があるが、この振が、初代鯉三郎の師である四代目扇蔵の伝えるものを含んでいるのではないか、という根拠となる点を三つあげると、

(1)「西川流秘伝書」の「西川之流」に次のように記されている。

西川扇蔵	初代
西川扇蔵	二代目
西川扇蔵	三代目
西川鯉三郎	四代目

この系譜は、舞踊史上でいう西川扇蔵の二代目・四代目・五代目の次に、西川流の四代目としてある。西川流の系譜から判断して、振付師としての実績がなかった初代と三代目を抜いてあるのは、自己の振付師としての正統性を強調していると推察される。

(2)「西川流秘伝書」を授与したのは、文久元年(1861)であるが、万延元年(1860)に、五代目扇蔵が没している。この五代目扇蔵家元就任について、西川流では継承争いがあったらしい。こういう理由から、初代鯉三郎には、正統な西川流継承者としての自負が窺える。

(3)後年の諸本による名古屋西川流の作風は能・狂言から取材したものが多く。また初代鯉三郎の芸風も、傾向として、淡々としていて、きつちりとしたものであるのに対し、伝書に引用されている曲は、芝居が下手であると評判された初代鯉三郎の不得意と思われる曲が多い。

従って、「妓楽踏舞譜」の中の振はその多くが、四代目扇蔵の伝えるところのものとして推定できる。なお、作品は、西川流、および、扇蔵空白時代の藤間流(四代目扇蔵はもと藤間勘助といって藤間流の人であった)の振付作品も多いのに留意したい。

2. 「妓楽踏舞譜」は舞踊譜というより伝書としての